

『荒瀬先輩とピヨの 777 日』

著：恵庭

ill：明神 翼

「なあ、もしもおれが海外勤務になったら、ピヨはついてきてくれるのか」

「商社勤めですから、その可能性もありますよね。すみません、僕、飛行機が大の苦手なんです」

「そんな話じゃない……」

「じゃあなんの話ですか」

先輩はゆっくりと僕から離れた。

両肩に手をおくと、僕の目線に合わせて少し屈(かが)んだ。顔をのぞきこまれるのはちょっと苦手だ。だって、至近距離で見る先輩はイケメンで、ううっ、やっぱりこの顔はすごく好きだ。

見つめられるとぼうっとしてしまうくらいかっこよくて、心臓がドキドキしてしまって、飛び跳ねたい気持ちになる。顔が近づく。

あ、キスされそう。素早く顔をそむけ、両手で先輩のくちを押し返した。

「キスはだめですって、言いましたよね」

「くちじゃないところなら、ヒモの定義にひっかからないからいいんだろ」

「……言っときますけど別料金ですよ」

「言い値払ってやるから、ふっかけてみろよ」

「円だと売春になってしまうので、エビ換算しましょう。ほっぺたなら十エビです」

「レート低いな……」

「ま、丸まってるエビじゃなくて、でっかい天然エビですからね！ 僕のバイト先だったスーパーは、十エビで一パックなのでばら売りはしません」

「バイト先、『だった』？」

そこは突っ込んで欲しくなかった。がっくりとうなだれて、「試食コーナーで食べすぎてしまって」と伝えた。

「ファミレスもコンビニも、スーパーまでクビになるなんて。このあたりでバイトできそうなところなんて他にないのにどうしよう」

「——それならキスと家賃を引き換えにしたほうが」

「だめです！」

キツとにらむ。お金なんかもらったらヒモになってしまう。

「ほっぺたにキスしていいとは言いましたが、僕はヒモじゃないですから、そこんとこ忘れないでくださいね。これはれっきとした商売です。サービス業です」

「客の心えぐりすぎだろ。サービス業なめるなよ」

先輩はまた怖い声を出した。でもほっぺたにふれたのはかすめとるみたいになわずかな感触だけで、僕はちょっとぼったくりと思われなかなって、心配になる。

話は数日前にさかのぼる。僕はソファに押し倒されていた。先輩は僕の肩をつかんだまま、「もう限界」と低い声でうめいた。

「ピヨが好きだ。付き合ってくれ」

「どこにですか？」

「おれと、付き合っ」

先輩はわざわざ言い直してくれたが、ちょっと意味がわからない。

「僕、男ですよ」

「知ってる。でも、おまえもおれのことが好きだろ」

なんだかよくわからないが、切(せつ)羽(ば)詰(つ)まった大男を刺激しても良いことはなさそうだから、にこりとして「好きですよ」と答えた。

先輩は嫌いと言われたかのような不審な表情を浮かべた。

「え、まさかほんとおれのこと好きじゃないのか？ でもピヨ、おれの顔を見ると赤くなるし、抱きついて嫌がらないだろ。キスした時もなんでやめろって言わなかったんだよ」

「キスって、酢豚事件の時ですか？ あの時は泣いててよくわからなかったですし、先輩、海外育ちだから、挨拶感覚なのかなって」

「……くちにキスするのは、恋人くらいだ」

愕(がく)然(ぜん)とした。

「恋人はちょっと……くちにキスしたら恋人になっちゃうなら、もう絶対にキスはしないでくださいね。僕、ヒモにはなりたくありませんから」

「え？」

先輩は驚いた顔をした。顔の前で手をひらひらと振ってみる。反応がない。

心臓が止まってしまったんじゃないかと心配になるくらい、ぽかんとしているのを見て、なんだか悪いことをした気持ちになる。

「あの、キス以外だったらいいですよ。なにかと引き換えなら、欲求不満の解消の、お手伝いします。先輩にはお世話になっていますし」

「……仮におれが金を払ったら、売春っていうんだぞ」

じゃあ、無しだ、法律違反はまずい。そうだ、シャンプーが切れてたんだった。

「お金じゃなければ法律にひっかかりませんか？ それならシャンプー買ってください。さすがに石(せつ)鹼(けん)だと髪がきしきしするんです」

「ピヨの身体って、日用品程度のお値段なの!？」

「あと、できたら目薬も買って欲しいです。大学でパソコンを使い始めたら、けっこう疲れ目が激しくて……えへ」

「今の恥じらう要素あったか？」

「え、じゃあ買ってくれないんですか？」

精一杯かわいこぶる。先輩は僕の可愛い子ぶりっこがお好きだ。今も言葉につまんで顔を赤らめてみたりして、やはり頭がおかしい。

シャンプーを買ってくれないなら早くどいてくれ、邪魔だ。

「払います。トリートメントもつけます」

先輩は息も絶え絶えにそう言った。

「じゃあどうぞ。ご自由になさってください」

別に減るもんじゃないし、シャンプーを買わずにすむのなら、元手がかからない分おとくだ。できれば、シャンプーはいい匂いのするやつがいいな。

「なんかピヨ、異様に落ち着いてないか？ もしかして、おまえそんなピュアな顔して、実は初めてじゃないとか慣れてるとか」

「男女ともに未使用ですけど、それってなにか不都合がありますか」

「まったくありません」

じゃあ、別に気にすることないじゃないか。先輩は時々よくわからないことにこだわる。結構な間のあとに、ずっと顔が近づいてきたので、顔を背けた。

「はあ？ おまえ今、してもいいって言っただろ。言ったよな？」

「キスは嫌です。欲求不満のはけ口にされるのはかまわないけど、恋人みたいなキスはしたくないんです」

「な……身体は汚されても心だけはってやつか？ 風俗嬢かよ！」

「風俗には行ったことないのでわからないですけど、でもくちは嫌です。キスするならこの取引は無しですよ」

「……こんのドエス」

先輩は心底恨めしそうに言った。

けれど僕だって、これだけは譲れない。くちにキスしたら恋人になる。恋人が身体を代償に対価を得たら、それはすなわちヒモだ。ヒモはだめだ。ばーちゃんの一番の教えだ。

死んだじーちゃんが、戦前生まれとは思えないとんでもないイケメンで、そしてばーちゃんのヒモだった。酒は飲む博(ばく)打(ち)は打つ女は作るの、煮ても焼いても食えないろくでもないヒモだった。

だから、ばーちゃんはくちをすっぱくして、「ヒモはだめだよ。ろくすっぽ稼いで来やしないのに、女にたかる人間のくずだ」と僕に教えた。

じーちゃんとは結局、死ぬまで離婚しなかったけれど、よその女に産ませた隠し子が数人いるらしい。それでばーちゃんは相当苦労したという。

人間として終わってる。ヒモはやっぱ、だめだ。だから、先輩とキスするのは、やっぱりだめだった。家賃の多くを払ってくれている先輩と恋人になったら、つまり僕はヒモと変わらない。恋人にだけは、絶対にならない。

「キスしなかったらなにしてもいいですよ。今のところシャンプー代ですけど」

もう一度念を押した。先輩はぶるぶるしたあげく「ピヨのアホ！」と叫んで、自室に閉じこもってしまった。

リビングに取り残され、僕は「今日も石鹸か……」とつぶやいた。

石鹸って、髪がきしきしするから嫌いだ。明日は、夕飯をケチってシャンプー買わなくちゃ。

先輩が僕の髪をなでて、「きしきしするなー。前はふわっとして手触り良かったのに」と笑うたび、なぜかよけいに腹が立つのだ。

本文 p42～48 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>